

●論文

神学と社会科学の間 —— ジョン・ラスキンの経済倫理

東方敬信

目次

序. いま起こっていること

1. キリスト教社会主義 (Christian Socialism)
2. ジョン・ラスキンの「脱回心 (deconversion)」
3. 認知心理学と神学
4. ヘドラムとラスキン
5. 『この最後の者にも』の倫理的意味
6. 神の出現

キーワード

脱回心 (deconversion)

キリスト教社会主義 (Christian Socialism)

スキーマ (schemas)

ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900)

アリスター・マクグラス (Alister E. McGrath, b.1953)

スタンリー・ハワーワス (Stanley Hauerwas, b.1940)

社会的情動 (the social affection)

神の出現 (the Presence)

富と美徳 (Wealth and Virtue)

Between Theology and Social Science: John Ruskin's Economic Ethics
by YOSHINOBU TOBO

私はキリスト教倫理あるいは神学的倫理学が専門であるが、最近になって、芸術批評だけでなく、環境問題などでジョン・ラスキン（1819-1900）の自然観や働く生活を見つめる経済倫理やさらに人間関係などを論じる人が増えてきている。それらの書物などを見て、本当は深いところでキリスト教との関連があるにもかかわらず、それがあまり注目されていないので、あらためてその脈絡から考察しなければならないと思った。また、逆にキリスト教の側の関心にも忘れられている部分があると思うので、ここに研究課題としたい。

それが「ジョン・ラスキンの経済倫理」というテーマである。直接の研究課題は、ラスキンの『この最後の者にも』（*Unto This Last*）という書物である¹⁾。この書物はまさにキリスト教の原点である聖書に記されたイエス・キリストの譬えをタイトルとしているものである。そして、社会の事実を叙述する学問が社会科学だとすると、その事実をどう判断するか、その価値を巡ってなされる議論が政策あるいは倫理になると思われるが、その良し悪しを決める価値判断を支えているのが「宗教的価値」あるいは「聖なる価値」である。神学とはその宗教的価値を扱う学問である。したがって、神学と社会科学の間というのは、人間観また社会観を前提としてある価値観を扱う領域ということになるう。

序. いま起こっていること

さて、昨年 2011 年夏ニューヨークの証券取引所のあるウォール街を占拠せよという呼びかけに大きく反応した社会意識は、アメリカ全土にさらにヨーロッパ各国に広がっていった。ロンドンでは、セント・ポール寺院の前庭に多くのテントが張られて、多数の人々が集まった。なぜなら、その近くに証券取引所があるからである。そのデモンストレーション中で見られた「99 パーセント対 1 パーセント」のプラカードは、その問題意識を強く印象づけている。少数の高額所得者に対して、圧倒的多数が貧困の中にいるという格差の現状に

1) ジョン・ラスキン『この最後の者にも』飯塚一郎訳（中央公論新社、2008 年）。

対して不満をうまく表現している。しかし、私が注目したいのは、2012年1月でも続いているセント・ポール寺院の前にできているテント村の継続をめぐる、英国教会の判断力である。ウォール街の運動は、ある公園から排除されたが、セント・ポール寺院側は、前庭を市民の意見交換の場として堂々と提供している。2011年10月には市民の自由な意見交換の場として提供する方針を貫くために、セント・ポール寺院の若い2人の司祭が辞任し、そのショック療法に対応して、カンタベリー大司教という英国教会の第一人者ローワン・ウィリアム師が11月1日に『フィナンシャル・タイムズ』誌に英国教会は市民の意見交換を尊重するという論文を発表した²⁾。同時に英国教会は、11月7日付で「教会と資本主義」という論文をネットに公開し、そこにキリスト教の立場から考察した資本主義論についての書物を参考書として数冊上げている。「ミッションと公共的課題 (Mission and Public Affairs)」という委員会の名前で国教会が出したものである³⁾。最後にセント・ポール寺院の主任司祭も辞任したこの英国教会の判断は、その社会的責任を負うという歴史的伝統から来ている。つまり、キリスト教の社会主義化と社会主義のキリスト教化を目指したF. D. モーリスを出発点にした19世紀のキリスト教社会主義 (Christian Socialism) 運動を受け入れた懐の深さから来ていると、私は判断する。

1. キリスト教社会主義 (Christian Socialism)

英国においてキリスト教社会主義運動の提唱者は、F. D. モーリス (Frederick Denison Maurice)、J. M. ラドロウ (John Malcolm Ludlow)、チャールズ・キングズレー (Charles Kingsley) などの英国教会 (Church of England) の聖職者たちであった。彼らは、キリストの権威のもとで「社会的連帯」を強調する神学を展

2) Rowan Williams, "Time for us to challenge the idols of high finance," *Financial Times*, November 1, 2011, <http://www.ft.com/cms/s/0/a561a4f6-0485-11e1-ac2a-00144feabdc0.html#axzzIn8UzFMFO> (accessed February 23, 2012).

3) "The Church and Capitalism: Reflection and Resources," compiled by Mission and Public affairs, Archbishop's Council, The Church of England, November 7, 2011, <http://churchofengland.org/media/1355764/churchandcapitalism.pdf> (accessed February 23, 2012).

開するとともに、労働者階級の権利擁護を訴えるチャーチスト運動を精神的に支援し、生産者組合・労働組合を奨励し生活環境の改善に尽した。また1848年にトラクト『人民のための政治 (Politics for the People)』を発行し運動の目的を公にする一方で、1854年には「労働者協会あるいは労働者大学 (Working Men's College)」を開設して直接、労働者教育を行っている。この労働者大学にジョン・ラスキンも参加していた。このような社会活動と並んで、彼らは16世紀の成立以来「体制教会」として存在してきた国教会が労働者階級の台頭に適切に対応することを求めた。すなわちこのキリスト教社会主義運動は、社会改革運動であると同時に教会改革運動でもあった⁴⁾。

当初、キリスト教社会主義運動は英国教会の主流派から異端視されて、F. D. モーリスも大学神学部教授の職を追われ、運動は1850年代後半以降一時的に衰退した。しかし、しばらくして英国教会において労働者階級との接点が無くてはならないと意識され、国教会に不可欠な意味があることが明確に認識されて、19世紀末になると、キリスト教社会主義は国教会で一定の承認を得るようになった。さらに第一次大戦を経た戦間期には、労働者階級の社会的地位の上昇に応じてキリスト教社会主義運動は教会の主要な方針の一つとなり、さらに第二次大戦中には、このキリスト教社会主義運動の指導者であるウィリアム・テンプル (William Temple) が国教会の最高位であるカンタベリー大主教に就任することによって、キリスト教社会主義は国教会の性格を特徴づけるものとなった。テンプルのキリスト教社会主義は第二次大戦後の福祉国家建設の精神的支柱となり、経済学者ケインズの協力を得た『キリスト教と社会秩序』⁵⁾ は、英国の精神的支柱となった。

2. ジョン・ラスキンの「脱回心 (deconversion)」

ここでキリスト教社会主義の運動に参加したジョン・ラスキンの個人的な経

4) ジョン・アサートン『現代キリスト教の市場経済論』小谷春夫、増井幸夫、八木俊輔訳 (聖公会出版、1999年)、167頁。

5) ウィリアム・テンプル『キリスト教と社会秩序』後藤真訳 (新教出版社、1951年)

験について考えてみたい。それは、彼の私的・内的経験というより、19世紀のキリスト教の葛藤を典型的に表現してくれているからである。

ラスキンは、熱心なピューリタンの信仰をもっていた母親に育てられ、しかも自宅で教育を受けて、直接大学に入る道を通った。したがって、現代の神学者の判断によると、初期のプロテスタント的信仰によって、ラスキンは、美しい事物が潜在的に偶像的であると考ええるようになったと思われる。1845年、26歳のときイタリアのトリノを訪れた際に、彼はその地域のピューリタンの立場のワルドー派の教会に出席した。この清貧をモットーとした禁欲的教会は、洗練されていない建築様式に従っており、それに対して、パオロ・ヴェロネーゼの「シバの女王」という絵画は素晴らしく、それをラスキンは何時間もかけて模写したという記録がある。このような周囲にある偉大な建築や芸術の名作とは比較すべくもない質素なワルドー派の教会に行ったのである。ラスキンはこの絵画の美や素晴らしい音楽、また「人生の華やかさ」と呼ぶものの一切を熟考したとき、このような「力と美」がひょっとするとその創造者の意図に反するものとなるのではないかと問わざるを得ないことに気づいた。ラスキンの言葉を引用すると、「神は、顔を美しく手足を壮健にし、これら未知の激しく素晴らしいエネルギーを創造し、物体の見事さとそれへの愛を創造した。また金や真珠や水晶、そしてそれらを輝かせる太陽を創造した。また、人間の想像力を素晴らしい思想で満たし、人間がその配置を与え輝かし完成させる力に触れることを許した。しかし、神がこれらのものを創造したのは、もしこれらすべてのものが被造物を創造者なる神から引き離すことさえなければ、ということではなかったか。⁶⁾」

ラスキンの心の出来事には、明らかに一つの危機が高まりつつあったと言ってもよい。現代の神学者マクグラスによれば「つまり、美が偶像の源となるのではないかというプロテスタント的な懐疑と、トリノの豊かな芸術と建築の遺産をじっくり見つめたときに感じた美的な驚きとの間の裂け目である。……」と

6) アリスター・マクグラス『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の新展開』芦名定道、杉岡良彦、濱崎雅隆訳（教文館、2011年）、362頁。

いうことになる。つまり、ラスキンには、美に対する何らかの規制がかかっていたのである。従って、このような美と驚きに直面して、彼は「脱回心」(deconversion)したのである。大胆な行為において、彼は美に従い、プロテスタントを後にすることを選んだ。「私は教会から出た。要するに 20 年間考えていたことから離れた。そして、最終的には回心せざる人間となった」という。それまでの枠組みでは自然に対する彼の情動的応答を表現するには彼の信仰が不十分であったということになるであろう。

しかし、なぜだろうか。ラスキンはどうしてこのようなことになったのだろうか。なぜ彼は、理性がある方向に引っ張り、美と想像力が別の方向へ引っ張ると考えたのだろうか。もし、すべてが神に由来するならば、いったいなぜすべてが神へ導くとはならないのか。真理、美、善性に対する人間の探求が、互いに混乱を生み出すことになり、あるいは究極的な源泉や起源から連れ去るようにして、なぜ神に集中することにならなかったのか。現代の神学者マクグラスは、「啓蒙主義が理性の優先性を誤って強調したこと以外に、その理由は存在しない⁷⁾」と断言している。なぜなら、啓蒙主義によるなら、理性は、もっぱら自然的秩序を観察された合理性の観点から考えるように促すからである。そして、人間の情動に影響を与える絵画や自然美は、誘惑だと考えるからである。それでは、このような分裂や理性の優越性をこえて、今日の認知心理学を用いて「見ること」を分析してみたい。なぜなら、ラスキンは、何の規制もかからないで、美そのものを固有価値として見ることを求めたらからである。

3. 認知心理学と神学

人間は外界と自らの内部器官から来る感覚情報を処理する⁸⁾。こうした感覚器官は高度に専門化し、光波、音波、触覚、圧、振動、動き、環境中の化学物質の特徴に対応する。感覚器官の一つ一つが、目の網膜にある細胞の化学反応のように、特定のプロセスによって機能する。そして、すべての感覚器官は神

7) 同上書、363 頁。

8) 以下は、前掲書、125 頁以下を参照。

経細胞につながっており、神経細胞は単一のプロセスによって機能する。光波の刺激は、脳にある多くの中継局を経て、やはり脳にある視野覚という最終目的地へと電氣的インパルスを送る。生の感覚情報から意味を構築することは、多く脳の中継局と最終目的地の両者の活動によって裏打ちされた無意識的なプロセスとなるのである。私たちの世界の主観的経験に対応しているのは、このような脳に基づいた知覚過程ということになる。私たちは痛みや官能的な触感を感じ、ラーメンを味わい、また美しいバラを鑑賞し、子供が泣くのを聞き、今つまりたことを知り、まさに階段を踏み外すことを知るが、これらは脳の活動によって行われるのである。

見るという経験は、光が水晶体を通して、眼球の後方にある網膜の受容細胞に入射し、受容細胞内で化学変化を起こし、今度は電氣的インパルスに変化して、このインパルスが視覚伝導路の中にある細胞にそって伝わり、最後に脳の視野に届くことによって生じる。視野は後頭葉の後方にある比較的大きな領域である。その構造は極めて複雑である。視野の細胞の配列は、目の視野の一連の地図のようなものと考えられる。それぞれの地図は、方向、色、動きといったさまざまな複雑さがもつ特定の物理的特徴の観点から視野を描くのである。左右の目からやって来る経路は、視野に至るごく最初の地点で交差し、視野のそれぞれ半分は、一つの眼球の視野のすべてを受け取るのではなく、両眼の半分の視野からの情報を受け取る。しかし、脳の視野は、右の視野と左の視野からの情報を受け取る。

ところが、もし目が損傷を受けると、視野障害や失明に至ることは明白である。しかし目が正常で光の人力に対して正常に反応しても、目から視野への経路の損傷によって盲目が生じることもある。なぜならその場合、視野は視覚伝導路から入力を受け取らないか、あるいは受け取る入力が悪化するからである。これはある種の視力障害の一つとなる。

たとえ目そのものと視覚伝導路の大部分が正常でも、視野（最終地点）自体が損傷されていると、視覚障害がやはり起こる。例えば、脳卒中の結果、視野への血液の供給が途絶えたときに生じる。これは結果的に、視野欠損とな

り、そこではせいぜい視野の一部のみが見えるだけである。極端な症例では、脳の両側の視覚野全体が障害を受け、結果的に皮質盲となる。こうした症例では、目と視覚伝導路は全く正常で、情報は感覚器と視覚伝導路によって全く正常に受け取られ、伝達されるが、視覚野はこの情報を正しく受け取ることができず、その人は見るができない。

視覚失認症は、さらに興味深い現象であり、知覚の点で重要である。それは、大脳皮質の別の部分、側頭葉にずっと近く視覚野ともつながりをもつ場所が損傷を受けたときに生じる。視覚失認症の場合には、人は対象を見ることができるがそれが何であるのかを同定できない。つまり、目、視覚伝導路、視覚野が正常なので、その人は環境の物理的特徴を適切に処理することはできる。うまくいかないのは、こうした物理的特徴を意味という蓄積された知識と結びつけることである。通常の知性をもった視覚失認症の患者は、りんごを前にして、その名前を挙げることができずに、次のように言うことがある。「それは丸い。表面は滑らかで光沢がある。緑色である。硬くて茶色の何かが先から突き出ている。—あなたはそれを髪をとくのに使うのですか」。

視覚失意症のこうした例は、視覚においても「ある枠組み」が必要であることを示している。つまり、この視覚のプロセスは、意味、機能、重要性を与えるための、記憶に基づいた表象を含んでいるのである。別の言い方をすれば、視覚、また知覚には動的な心的構造が必要である。知覚には表象の形成が関かわる。心理学では、表象はしばしばスキーマと呼ばれる。スキーマを世界についての心の地図、世界と交渉するための一連の規則あるいは台本、あるいは世界を分類するためのより多くの類型論に基づいた図表と考えることができる。

さらに、私の友人であるキリスト教社会倫理学のスタンリー・ハワーワスの言葉に次のようなものがある。それは「社会を見る表象」についての指摘である。「キリスト教倫理の主要な役割は、われわれが見るのを助ける試みを含む。というのも、われわれは見るのできる世界の内でのみ行為可能なのであり、またわれわれは見る訓練を受けることによってのみ世界を正しく見ることができるからである。われわれが見るようになるのは、単に目を向けること

によってではなく、物語への手引きを通して展開された熟練の技能によるのである。」。彼によると、事物をあるがままに「見ること」という訓練を行うことによって、「教会は世界に自らを本当に見る手段を提供し、それによって世界に奉仕する⁹⁾」ということになる。

いずれにしても、見ることには「スキーマ」が必要であることが分かる。この認知心理学の知覚作用にスキーマが必要なことと、イエス・キリストの神の国の譬えが重なり合うことが分かる。つまり、日常生活の中に「神の国をみること」ができることになるのである。山上の説教には「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しくない者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」と自然の中に想像力ゆたかに「神の国」を経験させてくれる言葉が散りばめられている。別の言い方をするなら、自然的美を自然的美としてその固有の価値を支えている価値の源泉（H・リチャード・ニーバー）としての創造物語（ハワーワス）がスキーマとして必要とされるのである。さらに、ジョン・ラスキンと同時代人のイエズス会の詩人また大学の講師ジェラード・マンリ・ホプキンス（1844～1889）の言葉を引用してみよう。彼は、ひとは自然を正しく見る習慣を培わなければならないと主張したが、「世界は神の威光に満ちている。／それは振り下ろされた剣から輝き出るように、燃え上がるだろう。」という言葉を残している。また、産業革命後のこの時代の詩人は数多く、産業が自然環境に致命的な悪影響をもたらしていることを謳っている。ホプキンスもそのような詩も見事に詠んでいる。ここからさらに、社会を見る目を養う「イエスの譬え」を考察しよう。

4. ヘドラムとラスキン

その前にラスキンとキリスト教社会主義運動を復興したヘドラムとの交流を考察しておこう。前述の19世紀中頃の草創期キリスト教社会主義の影響力が衰えた後、19世紀後半に再び活性化したきっかけは、1877年に結成された

9) スタンリー・ハワーワス『平和を可能にする神の国』東方敬信訳（新教出版社、1992年）、174頁。

「聖マタイ・ギルド (Guild of St. Matthew) (以下、G S M)」の運動である。創設者、国教会の聖職者スチュワート・ヘドラム (Stewart Headlam) は、聖マタイ教会の牧師として務めていたが、その教会がロンドンの貧民地区イースト・エンドにあったゆえ、貧困や労働者階級に責任を果たそうとした。その教会から始まった「聖マタイ・ギルド」(G S M) は、目的として、(1) 世俗主義者によるキリスト教会に対する偏見に対処すること、(2) 聖餐式と祈禱書を重視すること、そして (3) 「受肉の精神によって社会的・政治的問題の研究を進めること」の3点を挙げている。

大学在学中に F・D・モーリスの講義に出席し、その受肉神学に傾倒していたヘドラムは、社会主義者の影響も受け、労働者階級と社会主義に対する関心を深め、イエスを、「社会的・宗教的事柄に関するラディカルな改革者」であったと見るようになった。さらに「すべての人々はみな兄弟、神はすべての人の父、今も未来にも、またどんなところにも常に神が居ますことを証しするために教会はある¹⁰⁾」という信条に基づいていた。良きキリスト教徒であるためには、良き社会主義者である必要があると主張するようになった。19世紀に主流であった精神的・内面的救済の強調が労働者の劣悪な生活環境を前に説得力を失いつつあったこの時期、社会主義を明確に掲げる聖職者に率いられた G S M はその規模を拡大し、教区民の会合から始めて、組織は全国的な規模へと成長し、1877年には40名であった構成員は1885年には126名へと増加し、最盛期の1895年には構成員364名を数え、うち99名は聖職者であった、つまり構成員の4分の1は牧師たちであったのである。さらにオクスフォードやブリストルなどに支部を置いて、1884年から95年までは機関紙『教会改革者 (Church Reformer)』を発行した。

しかし、G S M の最大の不安定要素は、ヘドラム自身のパーソナリティにあったと言われる。「多くの同時代人にとってヘドラムはエキセントリックに見えた」と言われるように、ヘドラムは一種の特異性を持つ人物であった。彼

10) アサートン、前掲書、169頁。

を特徴づけるのは芸術、とくにバレエと演劇への傾倒であった。ヘドラムがバレエと演劇に強い興味を持つようになったのは、1870年代に劇場通りドルリレーンに位置する聖ヨハネ教会に赴任して以来である。GSM設立と同年の1877年10月にはコモンウェルス・クラブで「劇場とミュージックホール(Theatres and Music-Halls)」と題する講演を行った。さらに1879年にはラスキンなどの支援を受けて教会舞台ギルド (Church and Stage Guild) を結成している。当時、演劇に対するキリスト教会の偏見が根強く残っていたので、1884年にヘドラムは当時のロンドン主教F・テンプル (Frederic Temple) を教会舞台ギルドに招いたが、テンプルは招待を断り、バレエダンサーやその観客は「想像力による最悪の罪」に陥る危険があると批判した。ヘドラムの教会舞台ギルドはこのような偏見の除去を目的としたが、この主張は当時の国教会にとって「異端」と考えられるものであった。

イエスが肉を受けてこの世に來られた以上この世での生活も尊重されるべきであるという受肉神学の信奉者として、ヘドラムは靈的世界のみでなく世俗世界の価値も強調した。彼にとって、現世の悲喜を描く演劇をはじめとする芸術は、それ自体神を賛美することにつながるものであった。このような神学的背景以上に重要なのは、ヘドラム自身の芸術的気質である。彼は、礼拝と休息と娯楽の日である主日〔日曜日〕を正しく過ごすことは「美しいことである」と述べ、またイエスの生涯や人格も「美」であると形容した。ヘドラムの芸術主義は、「美の神格化」とさえ考えられるものであった。このヘドラムの芸術主義に一貫して大きな影響を与えたのが、1868年からオクスフォード大学の美学教授を務め、「美の偉大な使徒」と評されたラスキンその人であった。彼が強調したのは、文明を形成するのは人間の魂 (Soul) であることであった。そして、その人間精神の涵養には芸術は不可欠であった。ラスキンは『近世の画家』の序文において「美術の道德作用」に言及し、「芸術は感覚的でも知的でもなく、道德的なのである」と述べている。ラスキンにとって「美術は崇高な観念を表現することによって人類に資する」ものであり、善と美は等しいものであった。さらにラスキンとキリスト教社会主義運動の関係で最も重要なのは

労働者協会であった。

このキリスト教社会主義運動のその後の経緯として、キリスト教社会連合 (Christian Social Union) について触れておきたい。チャールズ・ゴア (Charles Gore) を中心として 1889 年に設立されたキリスト教社会連合 (Christian Social Union) (以下、CSU) は、GSM に比べてはるかに大きな影響力を持っていた。なぜなら、ヘドラムが一種のアウトサイダーであったのに対して、チャールズ・ゴアはオクスフォード大学ピュージ・ハウスの学長であり、ゴアとともに設立に尽力したスコット・ホランド (Henry Scott Holland) は聖ポール大聖堂の参事会員 (canon)、CSU の議長・ウェストコット (Brooke Foss Westcott) はダーラムの主教 (bishop) であり著名な新約聖書学者であったからである¹¹⁾。1889 年から 1913 年までに任命された新主教 53 人のうち 16 人までが CSU の構成員であった。主教はカンタベリー、ヨークの両大主教 (archbishop) に次ぐ国教会の上位聖職者であり、議会上院にも議席を持っていたので、キリスト教社会主義運動は国教会内において一定の承認を得た。このような背景から、CSU の構成員は 1906 年には GSM の最盛期の 10 倍以上の 6000 人にも上っている。CSU はその基本方針を明らかにするため、1889 年にゴアの編集による神学論文集『ルクス・ムンディ』を刊行した。「受肉の宗教に関する小論集」副題からも見てわかるように、CSU の神学の特徴は明らかにモーリスの伝統を受け継ぐ「受肉の神学」であった。『ルクス・ムンディ』には「受肉は地上を再び聖化する。御言葉が肉をとられてわたしたちの内に住まわれたからである」という文章もあるのである。

ヘドラムの GSM に対して、ゴアの CSU は完全に教会を中心とするものであった。『ルクス・ムンディ』に「教会」と題する論文が所収されているが、その教会観の特徴は、教会の選びを強調するものである。その教会観の基礎となっているのは、「キリストは少数の弟子を選び出した」という事実であり、教会はこの「少数の弟子」、すなわち十二使徒の意思を継ぐ機関であるという

11) 同上書、209 頁以下。

自覚であった。CSUの教会観には、19世紀末の英国社会に対する見方が大きく作用している。当時の国教会は、16世紀に国教会の理論を大成したフッカー (Richard Hooker) が理想とした、国民と表裏一体の国教会とは明らかに異なっていた。ゴアは、「教会と国家とを同じ社会の2つの側面とみなすフッカーの理論は、理想的なものではあったが、その後の歴史が達成できなかった理想であった。一体どのくらいまでこの国の王室や国民がキリスト教的であったと言えるであろうか」と述べている。彼は、イエス・キリストは最良の者に訴えた。彼は選んだ弟子に対して力を尽くした。彼らのために祈った。そして救いに与る人間の中核として彼らを鍛えたのであると語っている。これは「弟子性の倫理」に結びついていく。

5. 『この最後の者にも』の倫理的意味

ところで、ジョン・ラスキンの『この最後の者にも』という書物は、1862年に出版されたが、その序文によると、雑誌に掲載された段階でかなり反発が強いものであった。それは、チャーチスト運動に参加したり、労働大学運動に参加したりしたことによると考えられる。つまり、英国の上層階級またインテリ階級に属さない人々に味方をするような発言だったからであろう。全体としてラスキンの論調は、当時のまた今日でも継続している功利主義哲学に批判しているものと考えられる。この点で言えば、最近の厚生経済学の立場から、単純な功利主義哲学を批判している、ノーベル経済学賞を授与されたアマーティア・センの主張と重なり合うものである。さらに、環境価値の擁護や職人気質を内に含んだ労働者のギルド的人間関係の尊重の議論と重なりあうが、随所に引用されている聖書の箇所やキリストの権威を前提にする叙述の仕方から考えると、キリスト教的価値観から社会に光をあてた、キリスト教経済倫理の展開であるといえるであろう。したがって、『この最後の者にも』という書物は、キリスト教社会主義運動の流れにあるものと判断しても良い。しかも、その重要な文献ということができよう。

ジョン・ラスキンの『この最後の者にも』(1862)の立場は、功利主義・経

済人仮説（ジョン・スチュワート・ミル、デイヴィッド・リカードウ）を批判している経済倫理の立場と言えるが、彼は、本書の序文で「道徳的諸条件の第一は、正直ということが存在するということの信頼と、実際目的としてさえそれが達成できるという信頼とである¹²⁾」と主張している。この「正直」を基本にする意味で、彼は政治経済学において今日の言葉でいえば、「ブランドへの信頼」というものが「正直」によって成立することを主張していることになる。ここで、彼の経済倫理をキリスト教的伝統にある「美徳の倫理学」また「共同体の倫理的意味」から分析していこうと思う¹³⁾。

『この最後の者にも』は、全部で第四章であるが、現代でも示唆に富んだ書物である。ここではそれらの章を順を追ってキリスト教倫理として解釈していきたい。

第1章の「栄誉の根源」は、まさに功利主義の人間観と「異なる行為者としての人間」を語り、まさに経済倫理を「美徳の倫理学」の立場から展開していると言ってよい。ラスキンは、経済学者たちが人間の経済行為を功利主義の立場で叙述するだけで、たとえば正義感などの「社会的情動 (the social affections)」を経済理論に対する攪乱要素とすることに不満を感じ、むしろ正義感などという人間らしい行為を排除にしていることを批判する。彼によれば、経済行為を実行する人間はむしろ社会的情動を内に含んだ「魂の存在」であることを主張している。雇用者も召使いもただ単に利己心だけ、あるいは利益の最大化で結びつくものではなく、精神性をエンジンにしている行為者である。「召使いは精神 (a Soul) がその動力であるようなエンジンであるから、このきわめて不可思議な動因は未知数として、経済学者の知らないうちに、その方程式のすべてのなかにはいりこみ、それらの計算の結果をことごとくまちがったものにしてしまうのである。¹⁴⁾」なぜなら、雇用者と労働者の経済行為の動機は、利益の最大化ではなく、互いの品格をみとめる信頼に基づいた「チームワーク」だ

12) ラスキンの『この最後の者にも』、8頁。

13) John Milbank, *Theology and Social Theory* (Cambridge, Mass.: Blackwell, 1990), 197f.

14) ラスキン、前掲書、23頁。

からである。「精神が動力である (motive power is a Soul)」という表現に加えて、このチームワークを彼は「団体精神」と呼んでいる。美德の倫理学によると、人間の基本として身に付けていなければならないのは「勇気と自制」である。これは、アリストテレスにおいても、トマス・アクィナスにおいても強調されている。ジョン・ラスキン、まさに勇気と自制によって職業を理解する方法を示してくれている。彼が国民全体の豊かさを考える政治経済学を提供するからである。そして、そこになければならないのは、「正義の比較 (balance of justice)」という社会的情動が働く社会である。「正義を第一とし、私利を第二とするであろうというわれわれの暗黙の確信がなければ、いかにしても尊敬をかちうることはできないのである。¹⁵⁾」このように考えられて、各人が各人にふさわしい行動を実行することを

「軍人の職業は国民を守るもの

牧師の職業はそれを教えるもの

医師の職業はその健康を維持もの

法律家の職業はそれに正義を施行するもの

商人の職業はそれに物資を供給するもの¹⁶⁾」

——という分かりやすい叙述の仕方で、彼は説明している。この叙述にみられるのは、それぞれの職業に「勇気と社会貢献」が見られるべきであるという価値観である。経済行為も利益の最大化ではなく、「国民に物資を供給する」という使命を果たすものである。

第2章の「富の鉞脈 (The Veins of Wealth)」において、彼は、真の富を定義するのは「商業経済学」ではなく、国家という「共同体の豊かさ」を探究する「政治経済学」であるとする。彼の考えによれば、富は純良な品物が「勇気ある人の手」にあることであるので、まさに「経済倫理」を考慮しなければ理解できないものである。つまり「経済学者はその道徳的力を計算することはでき

15) 同上書、36頁。

16) 同上書、40頁。

ないが、いつかそれに注意するようになればよいと思う¹⁷⁾」と語るのである。

このように言ったとしても、ラスキンは、市場社会をリアルに理解しており、その上で品格のある共同体を考えている。彼によれば、そもそも富とは、競争社会で不平等を生み出し、まさにそれによって経済活動を活発化にするものであるから、不当なかたちで獲得された富は国民を害し、「正当につくりだされるときに、それが存在することによってなおいっそう国民を利するのである¹⁸⁾」という。この「正当につくりだされるとき」というところに社会的情動への配慮が見られる。しかも、「活動的で良く統治された国民の間では各人のさまざまな力量がじゅうぶん発揮されることによってためされ、専門的にさまざまな要求に充当され、その種類と功勞に従って報酬と權威をうけとるから、不平等であるが調和のある結果を生じるのである。」と言う。ここには「不平等であるが調和のある」社会形成が目指されている。換言すると、腕の良い職人が品格ある社会人であることを想定している。このように記しているラスキンは、「品格のある競争社会」を考えていたことが分かる。そして、ラスキンは、富の中に人間形成も入れている。「富の本質が人間を左右する力にあるのだから、富に支配される人が高貴な人であればあるほど、またその数が多ければ多いほど、その富もまた大きいのではないであろうか。また少し考えると、人間自身が富であること¹⁹⁾」と考えることが必要である。だとすれば、ある共同体や国家が豊かであることは、「立派な精神 (Souls of a good quality) の人間をつくる」ことも含まれることになるのである。

第3章の「地上をさばく者 (Qui Judicatis Terram)」について、キリスト教経済倫理の視点から論じてみよう。ラスキンは、この第3章を聖書の「箴言」を多く引用して始めている。箴言は「イスラエルの王、ダビデの子、ソロモンの箴言。」という言葉で始まっている。ソロモンとは、イスラエルの第三代目の王であり、マタイによる福音書で「栄華を極めたソロモン」という言葉がある

17) 同上書、66 頁。

18) 同上書、54 頁。

19) 同上書、67 頁。

ように、古代イスラエルを最も豊かにした王である。ラスキンがソロモンの箴言を引用したのは、「浄財と不浄財との区別の原則を守りうることを」欲の深い交易者にも可能であることを示すためであった。最初に彼が引用するのは「うそをつく舌によって財宝を積む者は／吹き払われる息、死を求める者」(新共同訳、10:2)である。さらに、「弱者を搾取して自分を富ませたり／金持ちに贈り物をしたりすれば、欠乏に陥る」(同22:16)。また、「弱い人を搾取るな、弱いのをよいことにして。／貧しい人を城門で踏みにつけてはならない。／主は彼らに代わって争い／彼らの命を奪う者の命を、奪われるであろう」(同22:22、23)と続けて引用して、その趣旨を解説している。このような引用からはじめて、ラスキンは、中心点において同じく聖書のマラキ書にある「正義の太陽」という救い主の呼び名を引用し、正義が統治において貫かれる時に社会に「回復の力(healing)」が現れるとする。この正義の統治が市場社会に現れることを考えると、私たちはアダム・スミスが「公平な観察者」を市場の成立にさいして掲げていたことを思い起こすであろう。しかし、ラスキンは、この正義がいまや大多数の人々から拒否されているのではないかと皮肉に語っているのである。その時に、彼が記しているのは公平な観察者という抽象的な表現より、「人格的な表現」である。つまり、地上をさばく者は「助けとなる正しい者」、「いのちの主」、「平和の君主」、「全世界の正しい審判者」という言葉である。それは、モーリス以来のキリスト教社会主義がもちいている「キリストの王権」という表象であろう。ここで、ラスキンは、神の法のもとにおける政治経済学と言うことによって、「キリスト教経済倫理」を暗示している。そこで結論として、彼は、労働への正当な報酬という公正価格の議論を引き出していく。彼はさらに自分の立場が社会主義ではないかと心配する読者のために形式的な平等主義ではないと説得する。それは「富の力に反抗するという点で社会主義に共通するものがありはしないかと読者が心配するといけないうから²⁰⁾」という言葉である。それではラスキンの「経済学の原理」という

20) 同上書、99頁。

問いを想定して、彼は、「わたしの経済学の原理は」「統治と協力とはあらゆることにおいて生命の法であり、無統一と競争とは死の法である²¹⁾」という『近代画家論』の最後の巻の一文の中に、すべて要約されているという。この「生命の法」とは貧者が富者の財産に権利を持たないように「富者が貧者の財産を犯す権利のないこと²²⁾」を認識することであると言うのである。そして、この章の最後にテモテの手紙一の「金銭の欲は、すべての悪の根です」とマタイによる福音書の「神と富とに仕えることはできない」を引用して終わっている。こうなるとますますアダム・スミスの「公平な観察者」というような「啓蒙主義とキリスト教の共謀」を吹き飛ばすようなキリスト教経済倫理の立場ということになるのではないか。

6. 神の出現

第4章の「価値にしたがって (Ad Valorum)」は、ジョン・スチュワード・ミルの「経済学」の基礎になっている価値論を批判することから始まっている。それは、ミルが「有用と快楽」という「交換価値」の基礎を考えるとところから批判していく。なぜなら、それは富と道徳が両立していないからである。富と道徳の両立という重要な主張は、ラスキンの「生なくしては富は存在しない (There Is No Wealth But Life)」という言葉でまとめられるかもしれない。しかし、このキャッチフレーズを理解するためには、彼の論理構成を詳細に検討しなければならない。まず、彼が医学と魔術を区別するように偽りの経済学と区別して「真の経済学」を定義しているところを検討してみよう。彼によると、「真の経済学という学問とは、生命に導くようなものを望み、かつ働くこと、また破壊に導くようなものを軽蔑し、破棄することを国民に教えるような学問である²³⁾」ということになる。しかし、この場合の「生命に導く」ということの内容は、きわめて厳格な内容を考えている。なぜなら、この定義に続く

21) 同上書、100 頁。

22) 同上書、101 頁。

23) 同上書、121 頁。

文章には、人々の「存在の条件」として「平和とか信頼とか愛のようなものを市場が提供する場合²⁴⁾」という文章があるからである。つまり、経済学には、あらゆる人間の存在の条件が検討されている部分がなければならないと言うからである。このような仕方では、彼は、当時の経済学者ミルやリカードを批判していく。しかも、彼によると経済学とは「交換の学（キャタラクティックス）」と考える。これは、現代経済学者フリードリヒ・ハイエクの用語にも通じるが、市場交換に参加するすべての立場の人々の益とならなければならない経済行為を検討する学となる。まさに、経済と道徳を両立する経済倫理の貢献する場面である。今の経済倫理の言葉でいえば、すべての「ステークホルダーを配慮する」学問となるのである。ラスキンによれば、このような交換の学が成立するには「神の出現」を待たなければならない。

たしかに、現代のある経営倫理学者によると、企業のステークホルダー経営は、究極のところ神の前での意思決定にならざるを得ないという主張もあるほどである²⁵⁾。もうこうなると、社会科学と神学の対話という事態を引き起こす必然性が認められなければならない。少し横道にそれたが、ジョン・ラスキンの論理構成に戻って行こう。

彼は、美徳の倫理学の伝統を利用しながら、富というのは「勇敢な人による価値あるものの所有²⁶⁾」という定義を用いることになる。ここで勇敢な人というのは、すでに述べたように「勇気と社会貢献」を熟慮して決断できる人であり、人々の存在の条件を破壊しないひとである。逆に言えば、生を破壊する経済行為を拒否し、軽蔑する人である。そして、ラスキンは、ステークホルダーの代表として労働と資本をミルやリカードを批判しながら丁寧に論じていく。そこで彼は、「経済学の究極の目的とは、良い消費の方法と多量の消費を学びとることである。いいかえれば、あらゆるものを用い、しかもそれをりっぱにもちいることである²⁷⁾」として消費者倫理にまでその経済行為の質を論じ

24) 同上書、122頁。

25) 田代義範『企業と経営倫理』（ミネルヴァ書房、2000年）、214頁。

26) ラスキンの、前掲書、128頁。

27) 同上書、153頁。

ていく。このように交換の学を展開して「わたしはこの一連の序説を終わるにあたって、次の重大な一事をはっきりと述べておきたいと思う。つまり、生なくしては富は存在しない²⁸⁾」というのである。しかし、彼の定義する、その生というのは何かが重要である。彼によると、そのあとの文章で、生の中に「愛の力、歓喜の力、讃美の力すべてを包含するものである。」とある。もう少し丁寧に彼の論述を追っておくと「最も富裕な国というのは再大多数の高潔にして幸福な人間を養う国、最も富裕な人というのは自分自身の生の機能を極限まで完成させ、その人格と所有物の両方によって、他者の生の上にも最も広く役立つ影響力をもっているひとをいうのである。」。こうなるとキリスト教隣人愛をステークホルダー経営に生かすことということになる。ここでまさにジョン・ラスキンは神の出現を論じるのである。

真の経済学とは、あらゆるものをりっぱに用いることを教えるものであるが、当時のイギリスの現状に対して、彼は嘆きながら批判的に論じていく。「ああ、食糧を与えられないのが最も残酷なものでもなく、それを求めるのが、最も正当なものでもない。生命は糧よりまさる。富者はただ貧者に食糧を拒むばかりではない。かれらは知恵を拒み、徳を拒み、救済を拒むのである。なんじ飼う者のない羊よ、なんじに閉ざされていたのは牧草地ではなく、神の出現である²⁹⁾」と、もうこれは教会の説教に近い語りかけの部分である。この神の出現と訳されているのは、大文字で出現とあるだけある。神の出現 (the Presence) である。まさにこうなると今日で言う「神学的倫理学」の展開とも言える。そして、ラスキンは、労働者が「最も高德 (holiest)、最も完全、最も純粹になる」と当時の状況を批判しながら語るのである。この背後に当時の経済学者たちへの批判があるのは言うまでもない。そして、この「神の出現」のながれで、自然環境との共存も語っている。「心のねがいはいまた目の光である。どんな景色も、常時飽くことなく愛でられるものではないが、喜びに満ちた人間の労働によって豊かにされる。田畑はなだらかに、庭園は美しく、果樹

28) 同上書、158 頁。

29) 同上書、162 頁

は実り、清楚な心あたたまる家屋敷の点在、生きものの声があざやかに響きわたるのである。音のしない大気にころろはない。それが快いのは、小鳥の高声、昆虫のうなり声や鳴き声、ひとの太い調子のことば、子供の気ままなかん高い声などー低い流れに満ちているときだけである。……路傍の野草の花も、栽培された穀物と同様、野鳥も森も獣も、飼いならした家畜と同じように必要である。それは人間がただパンだけにたよって生きるものではなく、荒野のマナによっても生き、神のすべての不思議なことば、不可知のわざによっても生きるからである³⁰⁾。このような語りかけは、今日でも十分希望の言葉として聞けるものではないだろうか。彼の自然環境との共存は、神の現前で最大限の新鮮な空気や清浄な水が存在する世界でもある。

以上のような叙述の最後のまとめとして、彼はマタイによる福音書20章に記されたイエス・キリストの譬え「ぶどう園の労働者と主人の非暴力的友情」を紹介して、希望の言葉をしめくくるのである。「やがて時いたり、王国が開け、キリストのパンと平和の遺産が、『この最後の者にもなんじ同様』与えられるであろうその日まで。³¹⁾」

このようなキリストの権威を前提にする叙述の仕方から考えると、彼の希望の論理は、キリスト教的価値観から社会に光をあてた、キリスト教経済倫理の展開であるといえるであろう。したがって、『この最後の者にも』という書物は、キリスト教社会主義運動の流れにある。しかも、その重要な文献ということができよう。

30) 同上書、169-170頁。

31) 同上書、176頁。

Between Theology and Social Science: John Ruskin's Economic Ethics

by Yoshinobu Tobo

For John Ruskin, capitalism was primarily the practice of false knowledge, which made self-interest commonplace without the intervention of virtue, and secured public order without architectonic justice. The triumph of political economy meant the promotion of certain quasi-virtues, such as busyness and frugality, in place of true political wisdom and Christian charity. Also, the displacement of the ethical in the public sphere was held to be coterminous with the triumph of secularity. After the retreat of public religion, a vacuum was created in which a merely "economic" regime could manage society, even without moral or religious consensus. But under the influence of Christian Socialism, Ruskin desires an integration of wealth with genuine virtue. In his *Unto This Last*, Ruskin wishes to bestow "kingly," "queenly," "noble" and "Christian," rather than merely mercenary, attributes upon the sphere of work and trade.